

2022.7  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とみ やま 富 薬

7号

第44巻  
No.396



ホオズキ *Physalis alkekengi* L. var. *franchetii* Hort.

(ナス科 *Solanaceae*)

**生 薬** サンショウ（酸漿） 夏の開花中に全草を収穫し、水洗後陽乾する。

**成 分** 苦味成分：physalinA, B, C、フラボノイド：luteolin、根には tigloyloxytropane 等。

**効 能** 鎮咳、解熱、利尿薬として民間で発熱、黄疸、水腫に用いる。根を同様に用いるが、過去には墮胎薬として用いたことがあり、妊婦には用いてはならない。

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



東アジアの温帯、暖帯にまれに自生状態でみられますが、普通観賞のため庭に植えられる多年草で、地中に長い地下茎を伸ばして繁殖します。茎はあまり枝わかれせず直立し、葉は互生し、卵円形で先は鋭形または鈍形、葉縁は大形の鋸歯を持ちます。6-7月、葉腋から柄のある下向の花をだします。がくは短い筒状で先は浅く5裂し、花冠はさかづき形、淡黄白色で中心部は緑色を帯び、先は浅く5裂します。花の終わった後、がくは著しく大きくなり果実を包み、後に赤くなります。その様子を『源氏物語』（平安中期）では「ほほづきなどいふめるやうに、ふくらかにて、髪のかゝれるひまひま、美しうおぼゆ」と玉鬘の容姿に例えられています。果実は液質で多数の小さな種子をもち、熟すと赤色となります。『古事記』（712）の「八岐大蛇」に「その目は赤加賀智のようで、一つの胴体に八つの頭と八つの尾があります」と、註に「此に赤カガチと謂へるは今の酸漿なり」ともあり、ホオズキの真っ赤な果実より付けられた名と推測されます。

子供の頃この果実を揉み崩し、萼の付け根に小さな孔を開け、中身を取り除いた果皮を口の中で膨らませては潰し、音を出す遊びがありました。姉は器用に作るのに私は破いてしまいできなかった時の悔しさを今になって思い出します。この頬をふくらませる仕草から頬突の名が付いたともいわれています。平安後期の『栄華物語』（1092）には「ほ、つきなどをふきくらめてすえたらんようにぞ見えさせ給う」とあり、『本草和名』（918）に「和名保々都岐」、『倭名類聚抄』（931-937）にも「和名保々豆木」の名があり、この頃にはホオズキをふくらます遊びがあった考えられます。

日本の風俗の一つとして浅草寺のホオズキ市があります。山東京伝（1761-1816）の『蜘蛛の糸巻』の「五雷除赤もろこし、虫の薬は酸漿」に「芝愛宕山の四万六千日は毎年六月廿四の縁日、御夢想の虫の薬とて青酸漿を商う」とあり、更に「事の起こりは明和（1764-1772）年中、愛宕下の青松寺の門前の武家屋敷の仲間が四万六千日の日、主人の庭掃除するときほほづきを取り丸呑みすれば大人に癩の種を切り、小児は虫気を封ずる」と記され、この言い伝えから四万六千日の縁日でホオズキの鉢植えを売ることになったと言われています。後に浅草寺の四万六千日の縁日でも売ることになり、今では「ホオズキ市」といえば浅草寺の縁日（7月9、10日）を指すようになりました。

江戸時代初期の本草書『大和本草』（1709）には「酸醬 此の草をほ、つきと云うは、ほ、と云う臭蟲、このんで其葉につきて食する故なり」と、ホオズキの別の語源説を唱えています。『本草綱目啓蒙』（1803）には「一種外殻矮扁なるあり。これをキンチャクホウヅキと云う。カボチャホウヅキ、ヒラホウヅキ（作州）、ククリヅキン（江戸）其餘数品あり」といくつかの品種名を挙げています。現在でも大型で果実も大きい「タンバホオズキ」や草丈が低く鉢植えに適した「サンズンホオズキ」、変わり者の「ヨウラクホオズキ」など幾つかの品種が残っています。

明の『救荒本草』（1406）に「姑娘菜」の名で「葉を採り、燻き熟し、水に浸し、淘め、苦味を去り、油塩に調へ食う。熟め摘み取りて之を食う」と全草を食用としたことが記されています。これを受けて日本でも『救荒本草抜粹』（1828）に「苗はよくゆで、よく浸して食うべし。老葉はほしていり粉にすべし」と、また『備荒草木図』（1833）に「葉燻で、みずに浸し、苦味を去り、調和え、食う。又実の熟したるものも葉の如く製し、食うべし」と食用にすることを薦めています。（村上守一 記）